



刈田元司 編

都市と英米文学

研究社

刈田元司 編

都市と英米文学

研究社

都市と英米文学

一九七四年八月二十日初版発行

編 者 刈 田 元 司

発 行 者 小 酒 井 貞 一 郎

発 行 所 研 究 社 出 版 株 式 会 社

東京都新宿区神楽坂一ノ二
電話東京(269)四五二一番(代)
振替 東京 八三七六一番
郵便 番号 一六二

印刷 製本
研究社印刷
黒田製本

© 1974 Kenkyusha Printed in Japan

3098-410090-1860

まえがき

田園と都市、荒野と文明というような対立する概念は、古くからの文学作品に重要なテーマとして扱われてきたが、都市と文学というテーマはそれらとはちがった次元に属するテーマである。文学という現象そのものが、人間の集まる集落ができなければ生まれなし、また作られないものではあるが、産業革命を契機としての都市の爆発が人間の生き方や性格にまで大きな影響を与えるようになったことを考えると、都市と人間との相関関係はいやでもおうでも文学の対象とならざるを得なくなったといえる。だからこのテーマの研究は、それほど歴史が古いとはいえないであろう。

イギリスとアメリカの文学をこの都市という観点から眺めたら面白いであろうという気持は、十数年前から抱いていた。断片的に資料を集めたり、個別的に作品を眺めたりしたことがあり、いつか機会があったら、自分ひとりの力では荷が勝ちすぎるであろうから、グループの共同研究として実行してみたいという希望をつないできた。ここに年来の希望を実現する機会を得て、本当にうれしいと思う。

この共同研究が研究社の好意によって出版されるにいたった事情については、「あとがき」で共同研究の実行責任者から説明することになっているが、研究の構想はまず渡部昇一と安西徹雄両君と小生の三人とでつくった。できればイギリス、アメリカ両方の文学を通史的に眺めたいという意図をもって、時代劇、作家別に研究者をさだめた。グループの参加者は上智大学英文学科の同僚諸君と、学外からの

数名の友人たちである。英米文学をそれぞれ都市という観点から鳥瞰したいというような野心もあったが、力不足をかこつような欠落の部分も生じたことは残念である。

このシンポジウムの論文は、アプローチの方法がそれぞれ異なっているが、すくなくとも、都市が人間の精神活動にどのような影響を与えたかについて多少の光を投げようという努力は惜しまなかったつもりである。

ある意味では少々わがままなわれわれのこの論文集の出版をこころよく引き受けていただいた研究社、ことに上田和夫氏に深く感謝したい。

刈田元司

目

次

まえがき

1

I 展 望

都市と文学

刈田 元司 3

都市とユダヤ・キリスト教の伝統

高柳 俊一 18

「世俗都市」論争

川中 康弘 45

II イギリス

古英詩の都市イメージの消失

渡部 昇一 63

チヨースーにおける都市のイメージ

永盛 一 80

スペンサーの脱都会パラドックス

別宮 貞徳 102

——田園詩の流れをたどって——

シェイクスピアにおける都市と田園

安西 徹雄 130

ジョンソン博士のロンドン

ピーター・ミルワード
山本 浩訳

162

ロマン派の都市像

佐藤 正司

182

産業都市と産業小説

巽 豊彦

216

——ギヤスケル夫人とマンチェスター——

G・K・チェスタトンと都市

中野 記偉

240

D・H・ロレンスにおける都市のイメージ

M・D・オブライエン
山本 浩・垣ヶ原美枝訳

259

T・S・エリオットの都市感覚

田村 一男

272

——『荒地』の場合——

III アメリカ

ソローと都市

粹 川 羔

291

現代小説における都市像

繁 尾 久

317

ウィラ・キャザーと都市

渥 見 昭 夫

335

トマス・ウルフと都市

酒本雅之 352

——「死よ誇り高き兄弟」を中心に——

現代詩と都市のイメージ

新倉俊一 366

——パウンドとオーデン——

都市と黒人小説家

フランシス・マシー
垣ヶ原美枝訳 387

演劇における反都市的志向

佐多真徳 408

あとがき

429

執筆者紹介

430

索引

446

I
展
望

都市と文学

刈田元司

現在、アメリカの総人口の七十パーセント以上は都市生活者であり、十年後にはこの比率は八十パーセント以上になるであろうという。こういう現象は、アメリカに限ったことではなく、現在の文明先進国に共通の現象であろう。生産の増大が国民に利益をもたらすという積極的な効果をもつ反面、公害ももたらすという消極的な、というよりは否定的な効果をもつものであることは、最近とくに論議の対象の大きな問題となっているが、同じように都市の問題も、たとえば道德観や人間性と関連させて、その否定的な面、破壊的な相が強調されることが多い。文学との関連の場合も同様である。

文学と都市との関係については、これまでも多くの論考がなされてきた。わたしのこの論文もこの問題を新しい目で眺めてみたいという目的のためである。もともと文学は人間を描くことを第一目的としている。しかも人間は真空の中の実在物ではないから、いろいろな環境やさまざまな状況に対する反応によって、自己形成をおこなない、発展していくものである。文学は個人と社会との関係を描くものであるということさえできるくらいで、その関係が国によっては個人に力点がおかれたり社会に力点がおか

れたりする相違があり、時代によって異なったりすることもある。時代別、民族別の文学の特徴の生まれてくる原因もひとつはそこにあるといえる。その環境もいけば重要なのは田園と都会との二つであると思われるので、文学を考える際に、都会との関連が出てくるのは必然的であるといってもさしつかえないのではないだろうか。

都市の発展

都市問題の権威として著名なルイス・マンフォードはかつて、都市がなければ、図書館も、美術館も、プラネタリウムも、動物園も、植物園も、コンサートも、ことに人間条件の多様性もないといったことがある。都市が住民にあたえる形而下的な利益を列記することによって、都市の概念を規定しようとしたものであるが、たしかに都市には、ただ「人の住んでいる場所」というような最も古い意味から数段飛躍した意味のふくまれてきていることは事実である。しかし、こういう多種多様の利便をあたえてくれる都市はどのようにして出現し、発展してきたものであろうか。アーノルド・トインビーの新著『発展する都市』（一九七〇）は現代の都市の爆発という現象を、都市の伝統の観点から歴史的に眺めようとした研究書であるが、トインビーは、五千年前から存在するようになった伝統的な都市、たとえばパレスチナの古都エリコと現代のメガロポリス（巨大都市、集合都市）とのあいだの唯一の共通点は、都市という人間社会の住人たちが、その都市の限界のなかで、彼らを生存させるに必要な食糧のすべてを生産できないという点である、といっている。伝統的な都市の発展を歴史的に見ると、古代の都市国家から、威信のための、政治権力のための、軍事的戦略のための、商業交易のための都市とさまざまな形の都市

がある。そして都市を成立させる条件として三つ考えられる。すなわち個別的な職業構造と、全般的な繁栄と、政治と経済の開放性である。都市を飛躍的に発展させたのは多くの科学技術の革命のうちの二つ、すなわち農業生産と家畜飼育の増大という進歩と、交通手段の能率の増大という発達である。しかしトインビーによれば、都市の爆発がイギリスで起こったのは十八世紀と十九世紀の変わり目で、産業革命に触発されて起こったことは勿論である。しかし人間生活の大きな悲劇——今日の公害の先驅——が生じたのもこの都市の爆発によってであった。第一の悲劇は、人間がみずからの科学技術によってつくりあげた人為的な環境によって自分を犠牲者にしたことであり、第二の悲劇は、人間がみずからを犠牲にするこの最も陰惨な結果から自分を救い出す方法が、ただ腕をこまぬいて自分のつくりだした悪と対決しようとするのではなくて、洞察力あるいは先見の明をはたらかせてその情性に打ち勝たねばならないということである。この人間生活の大きな悲劇が無情な運命によってではなくて、人間によって人間に加えられたということを考えると、この悲劇はいっそう悲劇的である。

だが人びとはなぜ都市生活をのぞむのであろうか？ たぶん都市生活の方が他の地域より便利であり、快適であるからであらう。都会に行けば仕事がある。都市は人間の文化活動の中心である。都市には大きな大学がいくつもある。さまざまな活動と刺激がある。つまり都市が人びとを引きつけるのはいろいろな理由からで、それに対するあこがれはバラ色である。しかし盾にはすべて二面があるもので、このような明るい面の裏がわに、人の心を悲しませ、慄然とさせる暗いものがたくさんある。たとえば高層建築のおかげで、日照権やら風圧の問題がでてくる。自動車の氾濫で、人間の歩く歩道が狭くなったり交通事故が多くなってくる。人間の貪欲と偏見のために、他人の犠牲においてよい生活をのうりと送る人たちが増加してくる。つまり、本質的に都市は何かより良いものを約束しているところではあ

るが、その約束がしばしば果たされないという点に大きな問題がひそんでいるのである。

都市がいつ、どのようにして発展してきたかははっきりしていない。ただ、「生命個体が維持されるためには周囲の環境とのあいだに境界面が必要であるように……私たち人間のように、高度に進歩した生命にとって、この境界は……幾重にも重層し、また多元的な複雑な構造をもってくる」と、都市の起源を生命の起源と比較して論じようとする人もいる(川添登『都市と文明』雪華社、昭和四十年、一二二—二ページ参照ように、人間という生物の性格のなかに集落組織に向わせるもののひそんでいることだけはたしかであろう。これと多少矛盾するように聞こえる論議をひとつ紹介したい。それはかつて翻訳したことのあるジョージ・サンタヤナの遺稿「旅の哲学」という論文で、自然主義的な哲学者の論だけに、人間の旅の精神の起源を植物の種子が風に吹きとばされて遠くの土地へ移動して根をおろすのにたとえていた。さきの川添氏のことばを借りれば、動物たちは「目に見えない檻」である自然の境界のなかに生活しているが、その「目に見えない檻」を飛びだして他の土地へ行くためには風の力を借りなければならぬ。それが旅の本質であるとサンタヤナはいいたいのであろう。そして一定の土地に根をおろして定着するとき、ふたたびそこに自然の境界がつくられ、種族の共同の生活がはじまることになるので、そこに動物的な性格が加わってくることになると考えられるのではないだろうか。きわめてあいまいな表現で、わたし自身確信はないが、人間の小さな集団が発展して、新しい次元とスケールが人間の生活に加えられ、都市にまで成長してくるものと思う。アリストテレスが都市について「人びとは都市に集まってきて生活する。よい生活をするためにそこにとどまる」といったことばは、あるいは都市の最も根本的な肯定的な面を規定しているのかもしれない。

都会の積極的な面にあこがれた例にジョン・サン・エドワーズをあげることができる。コネティカット

州イースト・ウインザーに住んでいた十八歳のエドワーズは、胸のなかで魂がさわいで回心にいたろうとしていたのを感じた。『告白』のなかで彼は、「神に対する意識がしだいに強くなってくるように思ったが、それから約一年半後ニューヨークへ説教に行った。そこにいるとき私は前よりもいっそうはげしく魂のさわぎを感じた」と書いている。ニューヨークは当時人口七千人くらいであったが、そのニューヨークで回心が起こった。だからニューヨークを離れるときは悲しかった。「一七二三年ニューヨークを去ったとき、マダム・スミスと彼女の息子の家族および市を離れるときは心が重く沈んだ。川でニューヨークからウェザーズフィールドに行ったが、市が見えなくなるまで見つめていた」。ニューヨークという都市の何に魅力を感じたのか、これだけの文章では明白ではないが、自分の宗教的な変革をもたらした新しい環境としての都市の影響力に対する素朴な賛美の念がここにひそんでいることはうかがわれる。

都市の性格

都会の魅力を、人の心を鼓舞する活力を声たからかにうたうたう文学者は他にもいる。南北戦争後のニューヨークという大都会に流れてきて、ほとんど路頭に迷うような最低の生活条件のなかで生きる道を探しもとめた浮浪児たちに激励の光をあたえる小説を書いたホレーシオ・アルジャーも、弱者をなぐさめはげます都会の明るい面を肯定していたといえる。都会にそなわる力に陰（マイナス）と陽（プラス）の二極があるとすれば、あるいはこのプラスの極は俗にいう「アメリカの夢」の一つの要素を成しているといえるかもしれない。

しかしニューヨークが多くの民族の世界の首府として重要であるばかりでなく、大都市をうたう二十世紀の叙事詩を形づくるといふ意味で重要であると予言した文学者がいた。ウォルト・ホイットマンである。彼は人間として、芸術家として自分をニューヨークと一体化した。ニューヨークに生まれた文学者で——メルヴィルもヘンリー・ジェイムズもイーディス・ウォートンも——ニューヨークを自己解放の手段としたものはいなかったし、民主主義の可能性の生ける寓話としたものもいなかった。ホイットマンは近代文明の示す大衆と民主主義を一体化することを躊躇しなかった。彼は都市こそ偉大な人間の舞台であると見た。

いまわたしは一つの名前のなかに、一つのことばのなかに、流動的な、健全な、拘束のない、音楽的な、自足的なもののあるのを知った。

わたしはわたしの都会のことばが古くからのことばであることを知った。

.....

百万の人口——おうような、すばらしい物腰——はきはきした声——歓待——最も勇敢で、人なつこい若者たち急流のかがやく流れの都！ 尖塔とマストの都！

湾にかこまれた都！ わが都よ！

（「マナハッタ」）

ホイットマンは彼の一冊の詩集のモデルと形式をニューヨークという都市のなかに、その量と大きさ、その流動性、刺激、危険のなかに見たのだ。ここにうたわれているのは、おびただしい数の刺激と、近代都市の目もくらむような多くの人間と光景のなから生まれた審美的な近代都市である。これと同じ原理を、角度こそ違え、ジョイスは『ユリシーズ』に、エリオットは『荒地』に、ハート・クレインは『ブリッジ』に、ドス・パソスは『マンハッタン乗り換え』に用いた。ホイットマンこそ個人の